

# To-Collabo通信

Tokai university Community linking laboratory

Vol.16  
2018.3.22



## 2017年度東海大学 To-Collabo プログラム最終報告会を開催 雑誌『ソトコト』編集長指出氏と山田学長が **若者×地域×未来** をテーマに対談

2月16日に、「2017年度東海大学 To-Collabo プログラム最終報告会」を開催しました。文部科学省「地(知)の拠点整備事業」の採択を受けて展開している「To-Collabo プログラムによる全国連動型地域連携の提案」の5年間の総括として実施したものです。湘南校舎をメイン会場に、高輪、清水、熊本、札幌の各校舎ともテレビ会議システムでつなぎ、学生や教職員ら約200名が参加しました。

当日は、ソーシャル&エコ・マガジン『ソトコト』編集長の指出一正氏が「ぼくらは地方で幸せを見つける」をテーマに講演。指出氏は、地方における若者たちの複眼的な視点で物ごとを見るところ、「観光以上移住未満」の「関係人口」を増やすことが大切と説明しました。

続いて「若者×地域×未来ー若者たちが地域を元気にするー」をテーマに、指出氏と山田清志学長が対談。地方と都市の関係性が変わってきており、移住や定住が頭打ちになり、関係人口を増やして地域を盛り上げる必要があるといった意見を語り合いました。

指出氏は「地域やまちづくりにかかわっている若者は、『マイパブリック』という言葉を大事にしています」と紹介。山田学長が、「本学は3万人の学生が通う大きな大学ですが、小さなセグメントを重ねていかないとマイパブリックは完成しないでしょう」と問いかけると、指出氏は、「3万人ほどの社会が実は一番変えやすい。学生が面白いと思うことができない社会にしていくのではないか」と力説しました。



第2部ディスカッションの様子



学生からも積極的な質問があった



講演する指出氏



指出氏と山田学長



各事業の5年間の成果や課題を報告した

## 第2部ディスカッション To-Collaboプログラムで育んだ4つの計画8つの事業

第2部では、8事業のうち6事業の代表教員が登壇し、「To-Collaboで育んだ4つの計画8つの事業」をテーマに議論。各事業の5年間を振り返り、それぞれの活動の成果や今後の課題を報告しました。

自身も「ライフステージ・プロジェクト」でユース計画「大学開放事業」の代表者として登壇した地域連携センターの池村明生所長は、「5年間で築いてきた基盤を今後いかに生かしていくか、学生の教育プログラムとして落とし込んでいくかが重要です」と総括しました。

最後に、梶井龍太郎副学長（元To-Collabo推進室長）が、「4計画8事業は本学ならではのプログラムで、ほかの大学にはできない取り組みです。文部科学省による補助期間は終わりますが、各事業による取り組みはこれまで終わりではありません。今後さらに地域の方々と協力しながらみんなでつくり上げていけるように、To-Collaboの関係人口を増やしていくたいと思います」と今後に向けた抱負を語りました。

## 湘南校舎

### — 文化・芸術 — 公開シンポジウム 「彫刻と生きる」



登壇者それぞれの活動や視覚・触覚を紹介した美術品鑑賞のポイントを紹介

大学推進プロジェクト「観光・イノベーション計画 文化・芸術事業」が、昨年12月2日に湘南校舎で、「ユニバーサル・ミュージアムが地域連携の扉をひらく 公開シンポジウム第4弾『彫刻と生きる』人類とブロンズの歴史、そして:」を開催。学芸員の資格取得を目指す学生や院生教職員のほか、他大学の学生や地域住民ら約150名が参加しました。

課程資格教育センターの篠原聰准教授によるシンポジウムの趣旨説明に続いて、(有)ブロンズスタジオ取締役の高橋裕二氏が「青銅、そしてブロンズの魅力」と題して基調講演を行いました。その後、行政関係者らによる活動事例の発表や研究者を交えたディスカッションも実施し、視覚と触覚を生かした美術品鑑賞のポイントなどについて意見を交わしました。

最優秀賞には小松菜の蒸しパン、マスカルポーネチーズと玉ねぎのクリーム、じゅがいものクリームを3層に重ねた「白い湘南平野菜のモンブラン」が、優秀賞にはタマ三郎をかたどったパンとサンドされた「タマ三郎deもなか」が選ばれました。

教養学部芸術学科デザイン学課程の池村明生教授とゼミの学生が、昨年12月17日に「神奈川県立花と緑のふれあいセンター 花菜ガーデン」で「ベジタブルもなか」を調理して90分の制限時間内にオリジナルの「もなか」を作りました。



90分の制限時間内にオリジナルの「もなか」を作りました。

## 湘南校舎

### — ブランド創造 — 「ベジタブルもなか レシピコンテスト」



会場からの質問に答える形で活発な意見交換が行われた

湘南校舎で1月20日に、公開シンポジウム「熊本地震の経験を湘南地域の防災対策に活かそう!」を開催しました。大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 安心安全事業」の一環で、2016年に発生した熊本地震の経験を湘南地域の防災に生かそうと企画したものでした。学生や教職員はじめ、地域住民ら121名が来場しました。

「熊本地震の現場にて」と題して九州キャンパス長(学長補佐)で農学部長の荒木朋洋教授が講演したほか、工学部土木工学科の杉山太宏教授が「阿蘇校舎の地盤や構造物の状況を解説。チャレンジセンター」「熊本復興支援プロジェクト」の学生と神奈川県立秦野高等学校の生徒が活動を報告しました。パネルディスカッションも実施し、災害時の行動や防災・減災活動などについて活発な意見交換も行いました。



多様な生物が生息するいい川をつくる重要性を語った吉村氏

## 湘南校舎

### — 安心安全 — 「熊本地震の経験を湘南地域の防災対策に活かそう!」

大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 ブランド創造事業」の一環で、平塚市と協力して開発した「ベジタブルもなか」の皮を用いた、地産地消のレシピを市民から募集し、28件の応募の中から書類審査を通過した5チームが実技審査に臨みました。

最優秀賞には小松菜の蒸しパン、マスカルポーネチーズと玉ねぎのクリーム、じゅがいものクリームを3層に重ねた「白い湘南平野菜のモンブラン」が、優秀賞にはタマ三郎をかたどったパンとサンドされた「タマ三郎deもなか」が選ばれました。

## 湘南校舎

### — 環境保全 — 「湘南里川づくりフォーラム 2018」



映像を用いた防災に関する講習を真剣に聞き入る子どもたち

湘南校舎で2月4日に「湘南里川づくりフォーラム2018」を開催しました。「湘南里川づくり」について広く知つてもいる、参加者間の交流を図ることを目的としたものです。この目的を達成するため、多くの参加者が積極的に意見交換を行いました。

大学チャレンジセンター・ユニークプロジェクト「よよさんぽ」が運営をサポートしました。東京消防庁渋谷消防署富ヶ谷出張所の協力を得て防災講習や消化器体験を実施。また、電気を消した校舎内を防災用簡易ライトで照らして探検したほか、自ら張ったテントで一夜を過ごしました。参加した児童は、「災害はいつ起こるかわからないので、今回学んだ防災の知識を家族や友人にも教えていきたい」と話していました。

## 代々木校舎

### — 大学開放 — 防災宿泊体験 「大学に泊まろう!」



映像を用いた防災に関する講習を真剣に聞き入る子どもたち

吉村伸一流域計画室代表取締役)が「治水と環境の統合技術としての多自然川づくり」河川空間の豊かさの再生を目指して」と題して基調講演を行いました。講演に関連付けて藤野教授のゼミ生も研究成果を発表したほか、分科会や全体での意見交換会も実施しました。

最優秀賞には小松菜の蒸しパン、マスカルポーネチーズと玉ねぎのクリーム、じゅがいものクリームを3層に重ねた「白い湘南平野菜のモンブラン」が、優秀賞にはタマ三郎をかたどったパンとサンドされた「タマ三郎deもなか」が選ばれました。

## 高輪校舎

### — 大学開放 — 「タカナワソナイトスナーディング」



訪れた多くの来場者を前に  
すてきな演奏を披露

高輪校舎で昨年12月13日に、大学推進プロジェクト「ライフルでオープンプロジェクト「タカナワソナイトスナーディング」を実施しました。地元住民や教職員、学生など約60名が来場。当日は、本プロジェクトの一環で同校舎内に開設している「たかなわ子どもカレッジ」で学生と交流している小学生たちが、ハンドベルで「デイズニーメドレー」を演奏しました。

また、情報通信学部の学生らのサークル「Takanawa Jazz Ensemble」や、区民による「みなど第九を歌う会」がそれぞれ演奏するとともに、小学生のハンドベルとコラボレーションした演奏も披露。企画・運営を担当した田丸智也准教授（高輪教育センター）は、「参加者それぞれにとって実りのあるイベントになつた」と語りました。

## 清水校舎

### 出前授業「海岸線後退の謎を追え！」



人工的に波をつくる装置を見学する児童たち

海洋学部環境社会学科の田中博通教授が、清水校舎で行われた付属静岡翔洋小学校の特別授業「海岸線後退の謎を追え！」で講師を務めました。大学推進プロジェクト「エネルギー・コンシャス計画 エネルギー・ハーベスト事業」の一環で、6年生を対象に海岸浸食や津波に関する知識を深め、海岸線保全への意識を高めてもらおうと毎年実施しているものです。

田中教授は31名の児童を前に数式や図を用いて、波の作用を説明。海岸に構造物が増えたことで、全国では毎年約160箇所の海浜が失われています」と話しました。

講義後は三保松原の海岸を再現した海洋学部臨界実験場に移動し、人工的に波を作る装置を見学。消波ブロックの耐久テストや津波の実験を行ってきました。

人工的に波をつくる装置を見学する児童たち

## 伊勢原校舎

### — スポーツ健康 — 「健康バス測定会」



各ブースの受付や測定を市職員とともに行った

大学院医学研究科ライフルアセンターが、昨年9月15日以降に伊勢原市役所健康づくり課との協働による「健康バス測定会」を実施しました。大学推進プロジェクト「ライフルでオープンプロジェクト」の活動で、伊勢原市内に在住する国民健康保険者の健康診断の受診を促進し、健康意識を高めてもらおうと行っているものです。

今年は約65名の地域住民が参加し、体育学部生涯スポーツ学科やチャレンジセンター「病院ボランティアプロジェクト」の学生、教員らが運営をサポート。「血圧」「血管年齢」「体质組成」「骨量」の4項目について測定しました。

今年度は、伊勢原市の各自会で10回、他のイベントと合同で2回の計12回にわたり測定会を実施し、今後は「市民学」を軸とした連携への発展が期待されます。

## 熊本校舎

### — 大学開放 — 「世界一行きたい科学広場 in 熊本2017」



子どもたちの好奇心をくすぐるさまざまな体験ブースが出展された

東海大学チャレンジセンター「先端技術コミュニケーションACOT」や「サイエンスコミュニケーター」が実験教室を開いたほか、NPO法人ガリレオ工房の滝川洋二理事長（東海大学元教授）による「たのしいサイエンスショー」もを行い、好評を博しました。

今年度は、伊勢原市の各自会で10回、他のイベントと合同で2回の計12回にわたり測定会を実施し、今後は「市民学」を軸とした連携への発展が期待されます。

## 札幌校舎

### — 地域観光 — 「シニックバイエイマップ「南さつまらまちめぐりMAP」



札幌市南区をはしる国道を軸に  
さまざまなスポットが紹介されている

大学推進プロジェクト「観光イノベーション計画 地域文化学部地域創造学科の植田俊助教らが、大学の近隣地域と連携し、地域的・観光的魅力を発見・発信しようと、2015年度から行っています。15年度は、南区の「藻南商店街」を対象に、商店街の魅力やおすすめスポットを紹介するマップを作成してきました。

今年度は、対象のフィールドが地元住民の生活圏であることを考慮し、観光客だけではなく、南区の地域住民も魅力を再発見できるよう工夫した「おすすめ周遊コース」もマップに盛り込んでいます。

# To-Collaboプログラムの総括と 今後の東海大学の地域連携活動の展望



池村 明生  
東海大学地域連携センター所長

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」の採択を受け、2013年度から取り組んできた東海大学の地域連携活動「To-Collaboプログラムによる全国運動型地域連携の提案」の補助期間が17年度末をもって終了します。これまで取り組んできたさまざまなプログラムの成果と学生への教育効果、今後の展望を地域連携センターの池村明生所長に聞きました。

## To-Collaboプログラムの総括をお聞かせください。

To-Collaboプログラムでは、全国8校舎が所在する各地域で全国共通の地域課題に取り組んできました。5年間の活動の結果、連携自治体の方々には大学との協働活動を身近に感じていただけたが、地域と大学との距離感も縮まつたのではないか。また、4計画8事業をテーマに掲げ一つの軸としたことで、本学の地域連携活動における共通の基盤を築くことができました。

地域連携活動を進めることは、「専門」という言葉に閉ざされるがちな大学に、地域で起きていく社会的な課題を積極的に取り込むことであり、我々、教職員や学生がそれを認識して、専門性を生かしながらいかに地域に還元していくかを問いつかけになります。その意味で高等教育機関における「地域連携」がどのような価値や意義を持つのかを考える機会を得られたことが、To-Collaboプログラムの最大の価値であつたと考えています。

これまで取り組んできたさまざまなプログラムの成果と学生への教育効果、今後の展望を地域連携センターの池村明生所長に聞きました。

## 学生の教育面での取り組みについていかがですか？

To-Collaboプログラム

では、学生の社会的実践力の育成を目指したパブリック・アチーブメント（PA）型教育の導入にも取り組んできました。社会の一員として学生一人ひとりのシティイズンシップ（市民性）を養うというPA型教育の必要性を、5年間を通じて学内に浸透することができたと感じています。これらを踏まえて、18年度から全学必修授業である「発展教養科目」（PA科目）が開講されますが、これもTo-Collaboプログラムの達成目標の一つでした。

補助期間は終わりますが、4計画8事業を通じて5年間で築いてきた基盤を生かして継続していくないと考えていました。To-Collaboプログラムによって、「本学に対する学外からの期待」が見えてきました。大学と地域の壁を越えていく必要があります。伊勢原市を中心に行なってきた「スポーツ・健康事業」は、湘南校舎に健康新設される中、さらに活動の幅を広げていく必要があります。どの取り組みも各校舎や自治体の状況を鑑みながら、バージョンアップさせていくことが求められています。

そして、これまで採択時に包括提携を結んでいる自治体との取り組みだけでしたが、今後は新たな自治体との連携や、大学と自治体との1対1の関係を超えた複数自治体との広域的な連携の可能性も感じています。

地域連携センターは、地域社会の窓口役であり、学外と学内の関係を結ぶHUB役です。地域連携、社会貢献と教育研究をどのように結びつけるか、調整の仕組みやノウハウを蓄積し、役割を果たしていくことを目的として、これまで東海大学地域連携紙『ちえん』の発行や講座の開催などさまざまな活動を行ってきました。今年度は、地域住民による施設利用も含め、合計77回の講座やイベントを実施しました。来年度も、大学と地域住民との交流を促し、さまざまな取り組みを通じてコミュニケーションする機会を創出してまいります。

## TOKAIクロスクエア

TOKAIクロスクエアでは、学園情報の発信をはじめ、地域住民との触れ合いを通じて、地域と連携し、ともに発展するための役割を担うことを目的として、これまで東海大学地域連携紙『ちえん』の発行や講座の開催などさまざまな活動を行ってきました。今年度は、地域住民による施設利用も含め、合計77回の講座やイベントを実施しました。来年度も、大学と地域住民との交流を促し、さまざまな取り組みを通じてコミュニケーションする機会を創出してまいります。



## 文部科学省 平成25年度「地（知）の拠点整備事業」採択「To-Collaboプログラムによる全国運動型地域連携の提案」

全国にキャンパスを有する大学ならではの「全国運動型地域連携活動」を柱に、地域特有の問題や共通課題を各校舎の学部、学生、研究者が共有し協力して解決策を見い出す取り組みです。To-Collabo（トコラボ）とはTokai University Community Linking Laboratoryの略称で、日本全国に広がる総合教育機関の高等教育拠点である東海大学（Tokai University）の特色を生かした教育・研究活動と地域をつなぐ（Community Linking Laboratory）ことを示しています。

## 『To-Collabo通信』Vol.16（2018年3月号）

発行 東海大学地域連携センター地域連携課

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4丁目1番1号  
TEL 0463-50-2406（直通）  
FAX 0463-50-2034

E-mail coc@tsc.u-tokai.ac.jp  
WEB https://coc.u-tokai.ac.jp/  
Facebook https://www.facebook.com/tokai.coc

トコラボ WEBサイト トコラボ Facebook



今後も活動情報などを発信してまいります!!

先駆けであること  
~Think Ahead, Act for Humanity~

